

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：36101

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14153

研究課題名(和文)小児がん経験者の自立へ向けた多職種連携と家族支援プログラム開発

研究課題名(英文)Family support program for childhood cancer patients aiming for autonomy

研究代表者

鈴木 智子(SUZUKI, Tomiko)

四国大学・看護学部・教授

研究者番号：60518067

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：保育所看護師に対し研究開始(2019)したがCOVID-19感染拡大防止策を講じる保育所での調査に制限が多くあった。COVID-19の感染拡大により2021年4月に緊急事態宣言発出され、日本政府によって6月から医療従事者への新型コロナウイルスワクチン接種が始まった。COVID-19感染拡大防止策時期に小児慢性疾患児が通う保護者の不安は、家族の仕事上感染の可能性が高いこと、県外移動制限により県外家族からのサポート支援不足など、感染の不安や行動制限がもたらす負担があった。保育所看護師や保育士による慢性疾患の子どもとその家族の状況に即した相談や支援の必要性と多職種連携の必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

新型コロナウイルス感染症の流行時に保育所保護者へ調査を実施して既往歴のある子どもの保護者が抱える不安と保育所看護師への期待がわかった。また、保育所看護師への聞き取り調査では、一人職種に対する不安があった。今後は小児慢性疾患をもつ子どもと家族を支える多職種連携に向けた取り組みも一層重要と示唆された。保育学生対象の調査では医療保育専門士が活動しているもののまだまだ認知されていない現状であることがわかった。今回は4年制大学児童学科学士を対象とし今後学ぶ機会があると思うが、慢性疾患の子どもが治療継続しながら社会参加できる環境の実現には、保育士を目指す教育機関での多職種授業が効果的であったと考える。

研究成果の概要(英文)：A state of emergency was declared in Japan due to the COVID-19 pandemic. However, because vaccination of elderly people was prioritized, support for children with chronic diseases who had not yet been vaccinated became an urgent issue at day-care centers. This study aimed to clarify whether children using day-care centers during the COVID-19 pandemic experienced the need for hospitalization, how such hospitalizations related to parents' anxieties during the COVID-19 pandemic. Anxieties were related to the burden caused by anxiety about infection and restrictions on movement, such as the high likelihood of family members becoming infected at work and a lack of support from family members living outside the prefecture due to restrictions on inter-prefectural movement. These findings suggest the need to provide counseling and support tailored to each child's and family's circumstances concurrently with measures to prevent the spread of infection among children.

研究分野：小児保健

キーワード：保育所看護師 多職種連携 家族支援 医療保育専門士

1. 研究開始当初の背景

保育所で勤務する看護師（以下、保育所看護師）は乳児を預かる保育施設に配置できるとされているが、全国調査（2015）では17.7%と配置率は低く、看護師未配置保育所が多い。小学校義務教育開始からは特別支援学校において医療的ケアも含めた看護師の健康管理も行われており、小児慢性疾患児が成長と共に健康的な生活を維持するには、家族不在の環境においても保育所等で健康管理できることが地域生活「自立」へ向けて必要なことであった。保育所看護師に対し研究開始（2019）したが COVID-19 感染拡大防止策を講じる保育所での調査に制限が多くあった。COVID-19 の感染拡大により 2021 年 4 月に緊急事態宣言発出され、日本政府によって 6 月から医療従事者への新型コロナウイルスワクチン接種が始まった。ワクチン接種は高齢者からスタートされたことから、当時ワクチン接種前の慢性疾患をかかえる子どもたちの支援は保育所において喫緊の課題であった。研究開始時期は研究フィールドも受け入れ困難なことが多く、調査可能な郵送法での調査に限定された。

2. 研究の目的

保育所に預ける母親へ郵送法により実態調査を行った。目的は実態調査をもとに保育所看護師で看護実践が統一して実施できるよう家族支援プログラム開発と家族機能を測定することである。小児慢性疾患児とその家族支援を行うために保育所スタッフ（保育士や看護師）による家族支援は社会的な重要課題であった。まず、COVID-19 の感染拡大時において保育所を利用する子どもの病気の有無と COVID-19 感染拡大時における保護者の不安の関連とその不安の実態を明らかにした。

3. 研究の方法

2021 年 6 月に A 県内保育所を利用する保護者 239 世帯を対象に自記式調査用紙と説明文書を同封し配布後、郵送法で回収した。質問項目は、子どもの入院経験の有無と疾患名、子どもの身体的・精神的不安の有無、親の身体的・精神的・経済的不安の有無、COVID-19 の不安の有無と内容、属性は親の年齢、仕事の種類であった。

【倫理的配慮】保育所長へ口頭説明と文書説明により許可を得たのち、保護者へ文書説明を行い、保護者からの返送をもって同意とした。大学倫理審査承認後に実施した。

4. 研究成果

有効回答 100 世帯、回答者はすべて母親であった。年齢は平均 36.0 (SD4.9) 歳、仕事はフルタイム 60.0%、パート 18.0%、自営業 5.0%、専業主婦 10.0%、育児休暇取得中 7.0%であった。子どもの入院経験なし 74.0%、あり 26.0%。慢性疾患名は喘息・肺炎、悪性新生物、アレルギー、けいれんなどであった。 χ^2 検定結果、子どもの入院経験の有無と COVID-19 の不安 ($p = 0.015$)、子どもの身体的不安 ($p = 0.006$)、子どもの精神的不安 ($p = 0.002$)、親の精神的不安 ($p = 0.002$) が有意に関連しており、いずれも子どもの入院経験があることで不安ありと回答した割合が高く有意に関連していた。親の身体的不安 ($p = 0.071$) との有意な関連はなかった。不安は、家族の仕事上感染の可能性が高いこと、県外移動制限により県外家族からのサポート支援不足など、感染の不安や行動制限がもたらす負担があった。子どもの感染拡大防止策と同時に、子どもと家族の状況に即した相談や支援の必要性が示唆された。

この結果に基づき家族支援専門職として多職種連携の在り方を模索し、保育所保育士への病児理解を促すことを目的に保育所保育士への感染対策など遠隔講義開催と医療保育専門士を招聘し保育士学生への講義を開催した。保育所において悪性新生物など慢性疾患の治療のため長期入院を経験した子どもや医療的ケア児の保育所利用が増えていることも把握できた。そこで、今回、大学病院小児病棟で病気の子どもの保育を担う医療保育専門士の活動を学ぶ授業を通して授業効果の実態調査を目的とした。

保育士養成課程科目「子どもの健康と安全」(2 単位) の 1 コマを大学病院小児病棟所属の医療保育専門士に役割と実際に関する講義を依頼した。授業は保育における日常の健康管理、子どもの体調不良時の保健的対応が主な概要である。講義に参加した学生 48 名のうち、調査の回答は 34 名 (70.8%) から得た。医療保育専門士の仕事の認知について、授業前は、わからない・ややわからないが 24 名、ややわかる 10 名であったが、授業後はややわからないが 1 名、ややわかった 16 名、よくわかった 17 名と仕事への認知者数は増えた。学びの達成度の 4 件法による学びの自己評価結果は、医療保育士の活動の現状、病気の子どもの楽しめる遊び、子どもに応じたかわり、保護者へのかわり、親子のニーズ、安心してすごすための環境づくり、病気の子どもの保育実践と 7 項目すべてにおいてそう思う、大変そう思うと自己評価していた。授業内

容の評価に関しては、学習目標が明確、授業内容がよく計画されていた、授業学習量が適切、医療保育士への興味について 4 項目すべてにおいてそう思うと回答を得た。役に立った内容の自由記載では、病気の子どもとかかわるための医療保育の活動や遊びの工夫を学べた。保育士として選択肢が増えたとの回答があった。多職種や病児対応への理解を促すことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鈴木智子	4. 巻 B55
2. 論文標題 保育所看護師の保健活動に対する質的研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 四国大学紀要自然科学編 第55号	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 鈴木智子
2. 発表標題 COVID-19感染拡大時において保育所を利用する保護者が抱く不安の実態
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tomiko SUZUKI
2. 発表標題 A qualitative study on the health activities of nurses working in nursery schools.
3. 学会等名 22nd Annual Meeting of Japan Society of Nursing and Health Care（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木智子、渡部光恵
2. 発表標題 非侵襲的陽圧（NPPV）使用者の療養環境と使用時間の違いにおける健康関連QOL 筋ジストロフィー患者の場合.
3. 学会等名 第25回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木智子
2. 発表標題 小児がんにより長期入院を経験し退院した幼児を持つ母親の思い
3. 学会等名 第46回日本看護研究学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tomiko SUZUKI
2. 発表標題 Transition Cares to Families having Children with Cancer: A Review of the Japanese Medical Literature
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 法橋尚宏編著、井須孝弘、泉澤真紀、井上ちはる、入江安子、岩佐美香、岩崎千歳、岩本真紀、太田浩子、岡田純也、岡本洋一、金川浩美、川端愛野、菊池良太、高域天、鷺野貴子、鈴木智子、副島堯史、竹内千夏、西元康世、平谷優子、藤澤盛樹、本田裕美他分担	4. 発行年 2021年
2. 出版社 EDITEX	5. 総ページ数 351
3. 書名 看護師国試ラピッドスタディ2022 第17版	

1. 著者名 法橋尚宏編著、鈴木智子、青木光子、新井恵津子、井須孝弘、岩佐美香、岩崎千歳、太田浩子、岡西幸恵、岡本洋一、金川治美、川端愛野、庄野亜矢子、竹内千夏、土岐弘美、堀口範奈、西元康世、平谷優子、宮地普子、森口由佳子他分担	4. 発行年 2020年
2. 出版社 EDITEX	5. 総ページ数 351
3. 書名 看護師2021ラピッドスタディ2021	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------